広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第37号　2009．3〉

ユニバーサルシティズンシップを育む国際コミュニケーション学習のあり方を求めて―３―

松尾　砂織　村上　直子　簑島　隆　大和　浩子
風呂　和志　妹尾　進一　岡　芳香　三田　幸司
加藤　秀雄　小早川善伸　中島　敦夫　藤原　由弥
掛　志穂　吉原智恵美　深澤　清治　平川　幸子
長松　正康　山本　透

１．はじめに

広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校（以下本学園）が掲げている「三原学園プラン」の特質の第１として挙げている21世紀型学力の１つが，国際的コミュニケーション能力である。本学園では，この国際的コミュニケーション能力を「確かな語学力を基に，様々なメディアを駆使して多文化を理解したり，人々と国際的にコミュニケーションしたりする力」と定義している。本研究を進めるために，2006年度から新たに国際コミュニケーション学習開発部会(以下本部会)を立ち上げた。2006年度から国際コミュニケーション科を設立し，本部会が中心となって教科としての題材開発とカリキュラム開発を進めてきた。

２．研究の方法

昨年度までの２年間は，領域「国際交流学習およびマルチメディア学習」で培った単元開発を基に，個別に開発してきた内容を統合して，国際コミュニケーション科のカリキュラム作成および評価方法の確立をめざし，実践的に研究を進めた結果，一定の研究成果をあげてきた（広島大学学部・附属学校共同研究紀要第36号，2007，pp.1－10.参照)。本稿では，開発した単元の継続実施と国際的コミュニケーション能力に関する総合的な評価，およびカリキュラム全体の評価等について検討する。

３．研究の概要

３．１　教科「国際コミュニケーションの目標」

本部会では教科「国際コミュニケーション」の目標を次のように設定している。

> 様々なメディアを介した体験や直接体験をもとに多文化への理解を深めるとともに，内容や質を吟味した情報を発信したり，相手意識を育んだりすることを通して，積極的・実践的なコミュニケーション能力を育み，世界市民として生きる態度を育成する。

３．２　めざす子ども像

前項の教科目標を基に，発達段階に応じて３年間ごとに４つの学年ブロックに分け，ブロックごとに具体的な目標とめざす子ども像を設定した。次に挙げるのが，学園全体でめざす具体的な子ども像である。

> 様々なメディアや直接体験を通して多文化を理解するとともに，発信する内容を吟味したり，相手の立場に立って考えたりすることで，他者と豊かなコミュニケーションを築きながら，自分の生き方について深く考え，発見できる子ども

なお，幼稚園での「国際コミュニケーション学習」は，これまで研究してきた国際交流の視点とマルチメディアの視点を持った保育を引き続き研究・実践していく。

３．３　つけたい力

上で述べた子ども像を実現するためには，どのような力を育むことが必要かを検討した結果，次の７つの力を設定した。ただし，この７つの力を設定する基盤となっているのは，領域「国際交流学習およびマルチメディア学習」で培った３年間の研究が土台となっている。

Saori Matsuo, Naoko Murakami, Takashi Minoshima, Hiroko Yamato, Kazushi Furo, Shinich Senoo, Yoshika Oka, Koji Sanda, Hideo Kato, Yoshinobu Kobayakawa, Atsuo Nakashima, Yumi Fujiwara, Shiho Kake, Chiemi Yoshihara, Seiji Fukazawa, Yukiko Hirakawa, Masayasu Nagamatsu, Toru Yamamoto: Seek for Studying in International Communication to Develop Universal citizenship －3－

表１　つけたい７つの力（2005年まで）

①直接的・間接的に多文化を理解する力
②メディアリテラシーを生かしたコミュニケーション能力
③共生を求めて情報を積極的に活用し発信する力
④外国語を使ったコミュニケーション能力
⑤自国の言葉での自己表現力
⑥情報を科学的に理解する力
⑦情報社会に参画する態度と能力

この中で示されている力は，2006年度に領域から教科に移項したのちも重要な視点であったが，研究を推進していくにつれて，これらの力の要素を抽出し，国際交流学習の視点とマルチメディア学習の視点を併せ持った融合的な視点が必要となってきた。学習内容を検討した結果，これらの力を育成するために，国際コミュニケーション科の学習は，「多文化理解」と「実践的コミュニケーション能力の育成」の２つの学習内容を扱うこととした。そしてその学習指導の中で次の４つの力をつけるように整理統合した。

表２　つけたい多文化理解の力

【多文化理解】
①日本文化の理解
②様々な文化の理解
【実践的コミュニケーションの育成】
③読み取ることを中心としたコミュニケーション
④伝えることを中心としたコミュニケーション

①②は，「多文化理解」を中核に据えた学習を通してつけたい力である。子どもたちは，メディアを介した間接交流や直接的に人とかかわる交流学習を通して，自国・他国の人や文化と出会い，かかわる経験を積む。その中で子どもたちは，自分をとりまく多文化の存在に気づき，積極的にコミュニケーションをはかろうとすることで，より広く自分以外の存在に目を向け，やがては自分の生き方や考えを発見することができるようになると考えた。

③④は，「実践的なコミュニケーション能力の育成」の学習を通してつけたい力である。21世紀の社会の中で生きる子どもたちは，様々な国の人々，様々な年代の人々と対話し，豊かな関係を築き挙げていく能力を身につけることが必要となる。具体的には，ボディーランゲージや，絵，写真，文字，英語などを，様々な相手との直接的，間接的なコミュニケーションの場で効果的に活用する力や，それを通して他者の考えを読みとる力が必要であると考えた。

４．研究計画

４．１　2006年度の研究より

前項までに述べた目標を実現するため，2006年度に以下の４種の学習内容を考案した。

①自国語・外国語によるコミュニケーションの学習
②情報リテラシーを育む学習
③直接出会う体験を軸とした国際交流学習
④メディアを生かした国際交流学習

これら４種の学習を単元の特性に応じ単独あるいは複合的に構成し，その評価方法の模索に努め，カリキュラムを完成するべく研究を進めた。

４．２　評価の観点について

2006年度の成果や課題を基に，本年度は次の４つの評価の観点を設けた。それらは「世界市民としての関心・意欲・態度」「世界市民としての思考・判断」「世界市民としての表現・技能」「世界市民としての知識・理解」である。この評価の観点は，既存の教科に設定されている４観点を下敷きとしながら，ユニバーサルシティズンシップを身につけた子どものあるべき姿とはどのようなものかを考え，具体的な姿として描き出したものである。「世界市民としての表現・技能」「世界市民としての知識・理解」は日々の授業の中で子どもたちが習得していくべき基礎的事項である。これらをもとに，交流活動を通しながらコミュニケーション手段を選択したり，知識を活用したりすることで，交流に関する課題の解決にむけた力，すなわち「世界市民としての思考・判断」の力が身についていくのである。そしてこれらは，自分を取り巻く社会への関心やコミュニケーションに対する意欲など「世界市民としての関心・意欲・態度」が大切であることが前提となっている。

４．３　３年間の見通し

<u>○第１年次</u>
・新教科「国際コミュニケーション」の構想作成および評価方法の試案作成
・国際交流学習とマルチメディア学習の融合的単元の開発と試行
・２年次の教科課程の編成

<u>○第２年次</u>
・「国際コミュニケーション」の幼小中一貫カリキュラムの作成
・国際交流学習とマルチメディア学習の融合的単元の開発と試行
・実践をふまえての評価方法・評価規準の妥当性検証
・テキスト試案の作成

<u>○第３年次《本年度》</u>
・２年間の研究を検証・修正，幼小中一貫カリキュラムの完成
・評価・評価規準の完成

・テキストの作成

５．研究の実際

（１）国際交流の視点から幼稚園の事例

○単 元 名 「いっしょにあそぼう」
○学　　年　４歳児
○実施時期　11月～12月
○実施にあたって

年間を通して継続的に行っている留学生との交流では，いろいろな文化や人に出会いながら，かかわることに楽しさや喜びを感じることで，いろいろな人の良さに気づき，その良さを認め受け入れようとする気持ちがもてることを大切にしている。

実践にあたって,「子どもたちから留学生へ」と「留学生やその家族から子どもたちへ」のメッセージを作成し，事前にそれを互いに見ることにした。留学生とは会ったことがあるが，その家族と会うのは初めてである。ビデオレターを通して間接的に留学生やその家族とやりとりをすることで会うことへの期待や喜び，一緒に遊ぶことを楽しみに待つ気持ちがより高まるようにした。また，外国の写真や地図を掲示し，保育環境を工夫して留学生により関心がもてるようにした。

○ねらい

・留学生や友だちと一緒に日本や外国の遊びをすることにより，いろいろな文化との出会いや人とかかわる楽しさを味わう。

（１）保育の様子について

11月28日（金）〈ビデオレター作成〉

担任が留学生のＡさん（ラオス）とＢさん（ガーナ）の家族（Ｂさんと奥さんのＥさんと子どものＣちゃん２歳)が来ることを子どもたちに話すと,歓声が上がった。子どもたちは以前，ＢさんにＣちゃんの写真を見せてもらったことがあり，Ｃちゃんと会うのを楽しみにしているようだった。Ａさんとは以前教えてもらった遊びを思い出し，また会える喜びを感じていた。そのような留学生への思いをビデオレターにして留学生に見てもらい，今度は子どもたちへのメッセージをもらって互いの思いを伝え合えるようにした。

12月５日（金）〈交流前日〉

留学生からのビデオレターをみんなで見た。ＡさんやＢさんとＢさんの奥さんのＥさんからメッセージをもらい，Ｃちゃんと楽しそうに踊るＢさん家族の姿をみんな笑顔で楽しそうに見ていた。自分たちの思いを留学生が受けとめ，喜んでくれたことを知り，明日会えることを楽しみにしながら降園した。

12月６日（土）〈いっしょにあそぼう〉

子どもたちは登園すると「今日，Ｂさん来るんよね。」と心待ちにし，留学生が来たのがわかると保育室を出て,急いで玄関のところまで迎えに行った。留学生に「おはよう」と少し恥ずかしそうにあいさつをすると，自分から留学生の手を握ってうれしそうに保育室まで案内する姿が見られた。そして，今日初めて会ったＢさんの家族を誘って,自分たちの好きなリズムの曲をかけ一緒に踊ったり，Ａさんにラオスの国の折り紙を教えてもらい，一緒に折り紙をしたりするなど積極的にかかわっていた。Ｃちゃんに何度も声をかけ，自分で作ったものをプレゼントして喜ぶ姿や，留学生に作ったものを見せ「じょうずね！」とほめられて喜ぶ姿が見られた。

その後,みんなでガーナの踊りをしたり,事前に作った魚のお面をうれしそうに身につけて，以前教えてもらったラオスの魚のゲームをしたりして，外国の文化にふれて楽しんだ。Ａさんからラオスには海が無いことや大きな川があり魚も大きいということを聞いて驚き，担任がラオスの川の写真を見せると両手を広げて「これくらい？」「もっと大きい？」とＡさんの話に興味津々の様子だった。降園前にはＥさんにガーナ語で絵本を読んでもらった。そのときに留学生と子どもたちの間には自然なやりとりが見られた。Ｅさんが「これは？」と絵本の動物の絵を指差すと「カメ！」と子どもたちはすかさず答えた。「ガーナ語はアッチッチ」とＥさんが母国語で話すと「アッチッチ？」と友だちと顔を見合わせながらあちらこちらで言う声がした。

すると側にいたＡさんが「ラオスではタオ」と言うのを聞いて「タオ！」とＡさんを見ながら笑顔で言った。Ｅさんが動きをつけながら楽しそうに「ウサギはアスワスワ」「耳が長いね。ガーナ語で耳はアスワ。だからアスワスワの意味は耳耳！」と言うと子どもたちは「みみみみー⁉」と留学生と顔を見合わせながら笑顔で笑い合った。留学生の話す言葉に興味をもち同じように言葉を繰り返し言うなど，外国の言葉の響きに面白さを感じているようだった。帰る時には留学生と自然に笑顔であいさつをかわし，抱きついたりタッチをしたりしながらふれあう喜びを感じていた。

（２）実践を終えての成果と課題

この実践を通して,子どもたちの「楽しかった」「○○してくれてうれしい」という思いが，相手への親愛感を生み,留学生や外国のことを「もっと知りたい」「また一緒に遊びたい」という思いや関心をより深めるということがわかった。一日の生活を一緒に過ごし，外国の遊びを一緒に楽しむ中で，子どもたちは留学生のおおらかで温かみのある豊かな感情表現にふれ，心地よさを感じながら，留学生に対して自然に思いを表していた。このような心の交流が伴った体験の積み重ねが，子どもたちに自分の周りの人やものへの親しみや

信頼感を育み，相手の良さを認め，受け入れようとする気持ちをもたせることにつながっていくと考える。

（2）小学校の事例

○単 元 名 「せかいのくにとなかよし」
○学　　年　１年生
○実施時期　11月～12月
○単元の概要

本学園の子どもたちは，幼稚園から国際交流の場を経験しており，外国の方と交流することをとても楽しみにしている。本単元では，交流会を通して留学生とかかわり合うことの楽しさや喜びを感じることも大切にしながら，さらに挨拶と国旗を題材として取り上げることで，多文化の存在に気づくことをねらった。

○単元の目標

・外国の方との活動を通して，かかわる楽しさを感じるとともに，世界の国々の挨拶や国旗に関心を持って活動し，それらに親しみを感じることができるようにする。　【世界市民としての関心・意欲・態度】
・挨拶の方法や言葉は国によって違うが，どの国も人と人をつなぐ架け橋であることに気づくことができるようにする。　【世界市民としての思考・判断】
・笑顔やジェスチャーを交えながら外国の方とかかわることができるようにする。
【世界市民としての技能・表現】
・世界にはいろいろな挨拶の言葉や国旗があることが分かるようにする。【世界市民としての知識・理解】

○計画（全４時間）

第１次　どんなあいさつがあるのかな？（１時間）
第２次　どこの国の方と交流するのかな？（１時間）
第３次　交流会をしよう（１時間）
第４次　あいさつはこころのかけはし（１時間）

（1）学習の様子について

（第３次　交流会）

この交流会では，すごろくを教材として取り上げた。このすごろくには，多文化理解の視点からすごろくのマスに挨拶と国旗の観点を盛り込み，ゲーム中に留学生に紹介してもらうことで，子どもたちの他の国に対する理解の枠を広げることができるようにした。さらに，すごろくのマスにかかわり合いを意図した活動や，留学生に質問したり，留学生からの質問に答えたりするコーナーを設けることで，留学生との積極的なかかわり合いが実現できるようにした。また，より多くのかかわり合いができるように，４人１グループの小集団の中へ留学生１人に入ってもらうようにした。

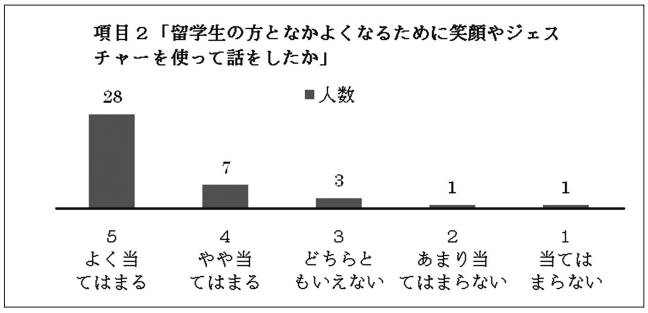
すごろくゲームの活動をいくつか記述する。「新聞のりゲーム」では，チーム全員で新聞紙の上にのるのだが，留学生に抱っこしてもらって嬉しそうな子どもたちの姿があった。「ききたい！しりたい！しつもんコーナー」では，留学生に質問をするというコーナーなのだが，あるグループではその国のじゃんけんについて質問をし，留学生からジェスチャーつきで教えてもらっていた。授業の終わりの振り返りでこのグループの子どもは「留学生さんの国のじゃんけんを教えてもらってよかったです。」とかかわり合う中で，「じゃんけん」という文化の違いにも興味をもつことができたようだ。

多文化理解として「あいさつゾーン」と「こっきさがし」のマスを設定した。「あいさつゾーン」では，留学生から自国の様々な挨拶を紹介してもらった。留学生の挨拶を聞きながら「長いあいさつだね。」「おじぎするんだ。」と，日本の挨拶と比較し，楽しみながら真似をしていた。「こっきさがし」では，グループに配布したミニ国旗カードを使って，留学生の国旗をチームみんなで探すというゲームである。子どもたちは国名を聞くと留学生と一緒に国旗を探して上に高く上げた。「この国旗じゃない？あっとるよね？」と留学生に相談しながらみんなで探していた。正解を発表すると，「やった！」とチームで喜んでいた。交流会の終わりになると，留学生と握手したり抱き合ったりするなど，自然に触れ合う姿も見られた。

（2）実践を終えての成果と課題

授業後に５段階評価で答えるアンケート（平成20年12月９日１年１組40人実施）を行った。「留学生の方と仲良く遊べて楽しかったか。」という項目及び「また交流会をしたいか。」という項目に全員が「よくあてはまる」で評価していることから，子どもたちは本単元に満足しており，今後の国際交流への意欲も高まっていることがわかる。また，「留学生の方の国について，もっといろいろなことを知りたくなったか。」という項目に対して，「よくあてはまる」が36人，「ややあてはまる」が４名と，全員が肯定的評価を行っている。さらに，多文化について「どんなことを知りたいか。」という記述アンケートでは，国旗や挨拶などの他に，料理や季節，文字などについても知りたいと思っている

表３　「よりよいコミュニケーションに関するアンケート結果」



ことがわかった。これらのことから，本単元を通して子どもたちの「外国のことをもっと知りたい」という多文化への興味・関心が高まっていると言える。

しかし，よりよいコミュニケーションの観点では，課題が残る。「留学生の方となかよくなるために笑顔やジェスチャーを使って話をしたか。」という項目についての結果から，よりよいコミュニケーションを意識して接することに課題がある子どももいたと言える。

子どもたちの「人とかかわることは楽しい」「多文化を知ることは面白い」という思いを大切にしながら，よりよいコミュニケーションを実現するための意識化も，これから継続的に行っていきたい。

（3）中学校の事例

○単 元 名 「Home visit in OKINAWA」
○学　　年　８年生
○実施時期　９月～２月
○単元の概要

本単元は，修学旅行先の沖縄で，在住するアメリカ人の家庭に半日滞在し，生活を共にする交流学習である。本校では，毎年12月に沖縄へ修学旅行に出かけており，２日目にこの交流学習ホームビジットを実施している。ホームビジットの学習には，文化や生活習慣を知る文化理解の要素と，英語でコミュニケーションを図るための英会話力向上の要素が含まれている。アメリカ人の家族と半日過ごす直接交流を通して，日本とアメリカの文化を比較してその相違に気づいたり，自国の文化のよさに気づいたりすることができる。また，学んだ英語表現を積極的に使うことによって，英会話力だけでなく，自己表現力も高めることができる。このように，本単元は自国と他国の文化理解を深めるのに適しているだけでなく，語学力の向上にも効果がある学習であると考える。

○単元の目標

・学んだ表現を用いて，アメリカ人の家族の方と積極的にコミュニケーションをとり，自国と外国の文化について学ぶことに関心をもつことができるようにする。　【世界市民としての関心・意欲・態度】
・メディアを介した自己紹介を工夫して行うことができるようにする。　【世界市民としての思考・判断】
・自分の考えをまとめ，メディアを活用して表現できるようにする。　【世界市民としての技能・表現】
・メディアを活用して，体験して学んだことをまとめる知識を持つ。　【世界市民としての知識・理解】

○計画（全50時間）

第１次　単元の理解とグループ決め（２時間）
第２次　自己紹介の仕方を学ぶ（５時間）
第３次　様々な英会話表現を学ぶ（12時間）
第４次　Home visitに必要な準備をする（５時間）
第５次　既習の表現を用いた対話練習（４時間）
第６次　Home visitに向けての準備（４時間）
第７次　Home visit体験《半日校外学習》（８時間）
第８次　デジタルポートフォリオ作成（８時間）
第９次　学習発表会で作品を交流する（２時間）

（1）学習の様子について

（第７次の様子）

沖縄でのHome visitは2008年12月18日（木）9：00過ぎに始まった。生徒たちを乗せたバスが，ホストファミリーの待つ嘉手納基地付近に近づくと，生徒たちの表情が一変した。生徒たちが，口々に英語で話し始めた。出会いの挨拶で必要な英会話を確認していた。

「先生，もうちょっとゆっくり言って下さいってどう言えばよかった？」と，普段はあまり積極的に英語を話そうとしないＡが私に声をかけてきた。

「“Please speak more slowly.”でいいよ。」

「そうだった。先生，Pleaseはつけた方がいいよね？」

「その方が丁寧に聞こえるよね。」

Ａが話し終わると，生徒を出迎えるホストファミリーの姿がバスの窓越しに見えた。生徒たちはその姿を見て覚悟を決めたようにバスから次々と降り，ホストファミリーを探して出会いの挨拶をした。上手く伝わった笑顔や緊張のあまりに引きつった笑顔など様々な姿があった。生徒たちは，ホストファミリーへ連れられて，各家庭の車に乗り込み，それぞれ移動していった。生徒たちには，16：30までは日本人同士であっても英語でコミュニケーションをすることと伝えていたので，英語漬けの一日となった。また，嘉手納基地へは立ち入りは制限があるため，生徒たちにとっては普段の生活と切り離された異文化漬けの一日でもあった。今回は，事後学習でデジタルポートフォリオを作成するために，各グループに学校所有のデジタルカメラを所持させた。学習の記録としては写真撮影を行わせることによって，他のグループに活動の様子を伝える材料をつくらせた。次の記録は，生徒が修学旅行のしおりにまとめたものである。

> （途中省略）言葉や生活の違いを超えて，人間の優しさや温かさは国が違っても同じということが分かりました。また，自分の今まで覚えていた英文を実際に交流した時，それを発揮することの難しさが分かりました。それでもジェスチャーなどをして，伝えようとする気持ちが大事だと思いました。

（2）実践を終えての成果と課題

今後は，事後学習であるデジタルポートフォリオの作成と，ポスターセッションなどの学習発表会を計画

している。このまとめの活動を行うために，生徒は様々な学習資料を残してきた。例えば毎時間書き溜めたワークシート，修学旅行中に書き溜めたメモ，旅行当日の様子を記録したデジタル写真などである。これらの資料を活用し，必要な情報をまとめることを通して，生徒がどのように変わっていったかを知ることができるのは，大きな成果である。そして何よりも，生徒自身が学習を通して変容した自分の姿を客観的にとらえることができる。課題としては，本単元がもたらす学習効果を明らかにし，来年度に向けての修正および改善点を見出すことである。現段階で学習が継続していることもあり，本稿では学習効果を提言することはできないが，学習の前後で生徒がどのように変容していったかを見取り，まとめていくよう計画している。

６．６年間の研究を通しての提言

最後に，本学園での６年間の国際コミュニケーション学習の試みを通して各校種，学年で行われた活動で育まれた新たな学力について，カリキュラム開発からその評価を含めたプログラム評価によって振り返ってみたい。

第１に，世界市民としての知識・理解や表現・技能の力を育てるためには，さまざまな交流活動が大きな役割を果たしたと言えよう。理解・表現能力の育成のために関心・意欲・態度が前提と考えられがちであるが，それらは活動の結果として育成されることも大いにあり得る。異文化や多文化という考え方が生まれにくい日本という生活環境において，いかに異なるものの見方や考え方にふれさせることができるか，あるいは意外な類似性に気づかせるか，日々の取り組みが実を結んだことには大きな成果を実感することができた。

第２に，留学生との直接的なふれあい交流に加えて，メディアを通した間接的な交流，あるいはクラス仲間との情報収集，情報発信などを通して，相手を思いやる心が育ったことも成果のひとつとしたい。メディアを伝達のツールとして使うだけでなく，表現内容を生み出したり相手の求めることを探したりなど，思考のツールとしたことも大きい。ただし，メディアの潜在的可能性を重視するあまり，表現方法に比べて表現内容の豊かさが軽視されてはならないであろう。また，伝達手段に依存するだけでなく，いかに自らの力で即座に自発的また双方向的コミュニケーションができるようになるか，といった表現力，発言力が求められるであろう。

第３に，デジタルカメラやデジタルビデオによる撮影や，コンピュータを用いて情報を加工・処理・表現する活動においては，生徒に情報伝達の目的，意図を明確にさせると共に，情報表現によって伝わる情報が異なることを知らせた。このことは，機器操作を含めたメディアを使いこなす技能（スキル）の向上だけでなく，表現能力の育成にも大きく寄与した。またその一方で，このような情報の創作活動を通して，日頃無意識に享受する情報には，創作者ならびに創作者の意図が存在するということを改めて認識させることができた。今後は，この認識がより発展し，情報を一元的に捉えるのではなく，多面的に評価できる真の力に繋がっていくことが期待される。

第４に，より良いコミュニケーションを実現するためには，上述のメディアを使いこなす技能や表現能力に加えて，相手の背景を十分に理解する能力が求められる。国際コミュニケーション学習におけるマルチメディアを利用した活動では，常に「相手の存在」を意識させることに留意した。これがコミュニケーションにおいて必要とされる受容能力の育成に繋がったということも成果の一つであると考える。

６年前当時，小学校に入学したばかりの生徒は卒業を迎える年度となった。３年間，６年間というより長いスパンでどのようなことができる（can-do）ようになることをめざすのか，それを計るための校種別，さらには学年別の指標としての「三原スタンダード」を具体的にどのように確立していくか，はこれからの課題であろう。

引用（参考）文献

１）広島大学附属三原学園編著（2005）「21世紀型“読み．書き．算”カリキュラムの開発」，pp.26－69.

２）大和浩子，松尾砂織，簑島隆，居川あゆ子，桑田一也，風呂和志，村上直子，山﨑裕昌，岡芳香，三田幸司，加藤秀雄，神重修治，杉川千草，谷川佳万，徳本光哉，藤井雅洋，池田明子，洲濱美由紀，久原有貴，深澤清治，平川幸子，長松正康，山本透（2006）「ユニバーサルシティズンシップを育む国際コミュニケーション学習のあり方を求めて―１―」，広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要，第35号，2006，pp.101－110.

３）村上直子，簑島隆，松尾砂織，大和浩子，風呂和志，八澤聡，岡芳香，三田幸司，加藤秀雄，谷川佳万，小早川善伸，長野由知，掛志穂，洲濱美由紀，久原有貴，深澤清治，平川幸子，長松正康，山本透（2007）「ユニバーサルシティズンシップを育む国際コミュニケーション学習のあり方を求めて―２―」,広島大学学部・附属学校共同研究紀要第36号，2007，pp.1－10.

４）広島大学附属三原学校園編著（2008）「21世紀型教育への提言　幼小中一貫で育つ子どもたち」pp.22－67